

# 【関東学院のびのびのば園 2022年度自己評価 報告】

## I 概要

2022年度は、のびのびのば園が、幼保連携型認定こども園となって10年目を迎えた年でした。

こども園開設当初から「一人ひとり特別です」という言葉を掲げ、関東学院の建学の精神に基づきながら「夢と希望と愛に満ちたこども園」を具現化することを目指してきましたが、10年目の節目においても、「遊びを中心とした活動から、子どもの主体性を引き出す保育」を柱とした園であることを再確認しつつ、新たな園の可能性へ向けて動きだした年でありました。

10周年の記念事業の柱である新しい園庭も年末に完成し、同時に職員がそれぞれの担当クラス的环境設定を工夫することで、子どもの「遊び」の幅がさらに広がりました。その中で、改めて「子どもの主体性を引き出す保育」を園としてどのように捉えるのか、また時代の変化に伴う保護者や子どもの変化にどう対応し整理するのが、問われるようになったと感じます。

また10周年を期に、「子育て支援を含め、野庭の地域と共に歩むこども園」であるということをより明確にし、地域の子育て世代への支援を始めとした、野庭地域の活性化に貢献する足がかりができました。

いずれにしても、職員一人ひとりがキリストの愛をしっかりと受け止め、日々の保育や業務、また子どもや保護者・同僚との関わりの中で、具体的な行動としてキリストの愛を実践していきたいと思えます。

## II 重点事業ごとの評価

### 1. 「夢と希望と愛に満ちたこども園」の確立

教職員一人ひとりが、園の理念を日常の保育に活かすために、まずは職員間のコミュニケーションの機会を大事にするようにしました。園のシステム上、全職員がまとまった時間で話し合うことの難しさがありますが、「子どもの姿の共有」と「本園の保育理念を形にする園庭改造」の2点を柱にして、話し合いの時間を取る努力を行い、その中で園の理念を再確認したり、保育についてのお互いの思いや情報を共有したりすることができました。

職員の専門性を高めるための研修は、全体での「子どもの主体性を育てる保育」についての研修を継続して取り組みました。個々の職員の「テーマ研修」は、まだ十分とは言えませんでした。

キリスト教の理解・浸透という面では、コロナ感染症がまん延する中でも、SNSを活用しながら、保護者向けのバイブルクラスを継続して開催することができました。**(目標達成)**

### 2. 保育の質の向上を目指した、施設設備の充実と効果的な活用

保育に対する職員一人ひとりの夢を形にした新しい園庭が完成し、保育への活用が始まりました。新しい園庭は、以前の園庭に比べ、子どもたちが活動(遊び)を選択する幅が広がり、遊び方にも変化が出てきました。今後は、よりよい園庭の活用・維持の仕方についてさらに研修を深めます。

保育室についても、目の前の子どもの状態やニーズに合わせ、それぞれのクラスの保育教諭が、木材を活用した家具等、手作りの設備や教材を作成するなどして、工夫して環境設定を行いました。

園内ICT環境を、園から保護者への情報発信や保護者からの連絡・質問のツールだけでなく、園児の登降園や体調管理(検温結果)のリアルタイムの情報についても活用するなど、保育に関わる情報の共有を効率的かつ確実に行うことができ、お互いの信頼関係の向上につながりました。**(大いに目標達成)**

### 3. 保育カリキュラムの充実

年度の後半には、新型コロナウイルス感染症の終息が見えてきたことを踏まえ、少しずつ本来の保育の姿に戻すことを始めました。と同時に、コロナへの対応の中から見えてきた課題から、本園の理念を堅持しつつも、時代や地域のニーズに対応した保育カリキュラムを開発・創造する動きもできました。

特に、認定こども園の役割りの一つとしての「子育て支援」をさらに推進し、本園の保育の重要な柱の一つとしました。具体的には、未就園児対象の「ころりんクラス」をさらに充実させると共に、学童期の子どもの居場所づくりを再開し、さらには園の外に出向いての子育て支援に取り組みました。

また、外部からの人材を活用した保育としては、「木育」の指導者による課外活動が新しく始まり、それを受けて、本園の職員による「木育」を取り入れた子育て支援イベントも開催しました。

新しい園庭を活用した保育カリキュラムは、まだ本格的には行えていませんが、栽培や食育については次年度に向けての具体的な準備が始まりました。

読書活動については、コロナ下にあっても「ひかり文庫」の活用は継続することができましたが、保護者や外部人材を活用した読み聞かせ活動の充実には至りませんでした。**(目標達成)**

#### 4. 地域へ開かれた子ども園の構築

こども園設立 10 周年の年であることを活用して、10 周年イベントの中で本園の活動や魅力を地域に発信しました。また、園のホームページをさらに充実させたことで、閲覧数の増加がみられ、インターネット上でも本園の理念や保育内容について、関心を集めることができました。

2021 度から始まった無印良品との連携によるエコバック作りは、在園児だけでなく、地域の小学生にも対象を広げました。また、無印良品及び関東学院栄養学部との連携による「親子で作れる簡単レシピ」第 2 弾を発行し、ケーブルテレビやタウンニュースに取り上げられました。

野庭地域の活性化については、「野庭住宅と野庭団地の未来につなぐ会」や「野庭緑彩の会」に参画する他、野庭団地のイベントの際に、無印良品と連携して子育て支援コーナーを開きました。

地域の子育て支援への協力としては、その他にも、地域ケアプラザ主催の子育て支援サークルに出向いて「出張子育て支援」を行ったり、地区社会福祉協議会主催の「公園あそび」に協力したりしました。

(大いに目標達成)

#### 5. 安定した入園児及び入職者確保に向けての対策の強化

安定した入園児の確保に関しては、未就園児対象の「ころりんクラス」からの入園が、新入園の年少 1 号児の 7 割近くを占め、子育て支援の充実が入園児の確保につながることでさらに明確になりました。また、2022 年度は、3 年間中断していた「関東学院両小学校見学バスツアー」を再開することができました。今後、本園から関東学院両小学校へ進学することの魅力さをさらに発信していくことで、入園児の確保につなげていきたいと思っております。

安定した入職者の確保については、本園での保育実習を行った学生、また就職説明会や本園の見学等で顔の見える関係になった学生からの本園へのアプローチが多く見られました。入職者を確保するためには、就職希望者と、顔と顔の見える関係になり、本園の理念や保育の内容きちんと伝えることが大事であることが改めて確認されました。結果的には、新卒学生に対する採用募集に対して、本園で保育実習を行なった学生から 2 名の応募があり、その中から 1 名の採用となりました。

(目標達成)

### Ⅲ 2022 年度を終えての課題

「一人ひとり特別です」という本園の理念に基づいた「キリスト教を土台とし、子どもの自主性を引き出す保育」をさらに充実・発展・深化させていくためには、職員一人ひとりのスキルを向上させると共に、管理職だけでなく、職員一人ひとりが、チームの一員として「より良い保育、そのためのより良い環境」について考え、将来に向けての夢を語り合うことが大事です。

今後は、新しい園庭の活用と室内環境整備をさらに推進していくと同時に、本園の理想とする保育を体現するための環境として、園舎を含めた施設・設備はどうあるべきかということについても、長期的な視点での検討を開始していきます。

そのためにも、職員研修の種類や機会を広げることで、職員個々について、その視野を広げ知識やスキルを向上させると共に、全体研修の中で「子どもの主体性」についての園として共通理解を整理していきます。

さらには、園の活動について、個々の職員のスキルだけに頼るのではなく、組織として力を発揮できる職場になるように、勤務体制（シフト）や役割分担、人材育成など、職員体制の検討が必要です。

子育て支援については、本園のスタイルが定着しつつあり、今後はそれをさらに充実させるとともに、地域連携としての働きについても、より多くの方に知ってもらうことで、「野庭の地域にあるのびのびのば園」としての本園のブランドを高め、入園希望者の増加につなげていきます。

### Ⅳ 2022 年度の主な実績

- ・こども園設立 10 周年の年として、記念礼拝・式典を始めとした 10 周年記念のイベントを開催したり、ホームページ内に特設サイトを立ち上げたりする等して、本園の理念や保育の内容について広く周知した。
- ・園庭改造の事業が完了し、新しい園庭を活用した保育が始まった。
- ・本園独自の子育て支援の取り組み（ころりんクラス、ぶどうの木、のびのびのが軌道に乗り始め、広く内外に周知されてきた。
- ・地域連携の取り組みの一つである野庭地域の活性化への協力は、それぞれの会合に参画するだけでなく、そこから派生した無印良品との関係をさらに充実させ、地域連携と子育て支援の充実につながった。
- ・コロナ下にあっても、園内の ICT 化の推進により、保護者への連絡や保護者からの連絡を効率的かつ確実に行うことができ、保護者との信頼関係の向上の向上につながった。